来たれサッカー部！

エイジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
来たれサッカー部！

【Ｎコード】
Ｎ９２７４Ｚ

【作者名】
エイジ

【あらすじ】
グラウンドの脇に新築の部室が完成した！
しかし、その数が足りない。
男子サッカー部と女子サッカー部で、部室を賭けた試合を行うことになった。
男子の方が有利と思うだろう？　でも、男子には勝てない理由があるのだ……

一　部室完成

「新築」

なんときらびやかな響きだろう。

この春、運動部の新しい部室がグラウンドの脇に完成した。

建設中から運動部員は興奮して、洗濯機が運び込まれたとかエアコンを取り付け中とか、そんな設備の充実ぶりを噂しあい、ついには壁が白いとか畳が青いとか、どうでもいいことまで目を輝かせて噂しあった。

その部室がついに完成した。

部室の内部は噂よりも立派で、冷蔵庫やキッチンがあり、シャワー室、テレビもある。

「ここに住みたい」

運動部員は口々にそう言った。しかし、その数が足りない。

俺たちサッカー部にも、この夢の設備の部室が振り分けられたが、男子と女子で部室がひとつしか貰えなかった。一緒に使えばいいのだが、女子からは文句が続出。部室は更衣室なわけだから、文句が出るのは当然と言えば当然だ。

「男子は草むらで着替えれば？」

とか、

「いっそ男子は廃部でいいんじゃない？」

とか勝手なことを女子たちに言われたて、ならば試合で決着をつけて、どちらが使えるか決めよう、ということになった。もちろんサッカー対決。新築部室を賭けた、

「男子サッカー部ＶＳ女子サッカー部」

の戦いだ。

俺たちは腐っても男子！　負けるわけがないと思うだろう。しかし試合が決まったとき、女子から失笑が巻き起こった。つまりは俺たちはそういう存在。

女子サッカー部は全国大会の常連だが、俺たちは一回戦も突破できない。

選手権とか大きな大会で女子が勝ち進むと、学校や保護者は狂喜乱舞の大盛り上がりで、そういう時、とっくに敗退してる男子は女子のサポートに回り雑用にこき使われる。実力社会の縮図か、そんな情けない現状だから日頃も女子部の連中は男子部員をバカにしている。

前なんか、練習を終えて帰ろうとしたら、

「今日はデート？　ああ、デートには一人足りないか」

なんてキツイ言葉を投げかけられた。
たしかに男子部員はモテないけど、あまりと言えばあまり……。
今度の試合は、単に新築部室を賭けるだけじゃない。負けるにしても、いや勝ちたいが、負けたとしても、男らしい負け方をせめてしたいのだ。前のめりに倒れるみたいな……。

二　部員募集

試合は一週間後と決まった。
男子部員は7人しかいないから、それまでに少なくとも4人集めなければ11人には足りない。それが現実だから仕方ないが、男子はメンバーから集まなければならない。
「キャプテン、女子との試合はいつ？」
と、キーパーの岸田が部室に入ってきた。
「なんとか一週間後にしてもらったけど、それまでに部員を集めて練習しないとな……」
俺は頭を抱えた。
今、使ってるこのボロ小屋のような部室は、もうすぐ取り壊される。
女子は人数が多いから、現在、余ってる教室を部室として使って

いて、だから無条件で俺たちが新しい部室を使えると思っていたら、そんなに甘くなかった。このまま試合に負けたら、男子部は行くところもなく廃部。俺がキャプテンの代で廃部とは、ＯＢの方に申し訳ない……。

「キャプテン、メンバーが集まらなければ、女子がメンバーを貸してくれるって言ってなかったっけ？」

「言ってたけどさあ、女子をメンバーに入れて、まともに働くわけないよ。ヘタすりゃこっちのゴールを狙ってくる。だから自力でメンバーを揃えるしかない」

前途多難……。

そんな時、新しい問題が起こった。

ディフェンスの山崎と近藤が、男子サッカー部を辞めて女子サッカー部のマネージャーになると言う。

「山ちゃん、コンちゃん、どーいうことだよ！？」

まるで意味が分からなくて二人に問いただしても、要領を得ないことをぶつぶつ言うだけでラチが開かない。しかし二人は時折だらしない笑顔を浮かべるのでピンときた。

「お前らってさあ、もしかして彼女ができた？」

「……それは」

動揺してる。どうやら図星のようだ。

「バッカじゃねーの、その彼女って女子サッカー部のやつだろ！？」

「そ、そうだけど、偶然だよ。……なあ」

「う、うん」

山崎も近藤もしどろもどろだ。これはもう、女子のあからさまな破壊工作。こっちはまともに試合をしても勝てるか分からないのに、さらに念を押すように男子サッカー部を壊しにきた。

「お前らって彼女できたことある？　おかしいと思わない？　向こうが男子部を分裂させようとしてるんだよ。二人とも女子部のマネージャーになるんだろ？　男子部に戻らないようにお前らを監視するつもりだよ。彼女なんて名ばかりで、監視された上に雑用とかやらされるんだよ。もう、ほとんど奴隷」

「そんなことないよ……。マネージャーになるのは、少しでも一緒にいたいからって言われて……。それに俺、キスだってしたんだぜ」

山崎がボソッと言った。

「キスぅ！？」

そこまでするか女子部員。

「コ、コンちゃんもキスした？」

「……うん」

驚いた……。色仕掛けも、そこまで手が込んでるなら見事だ。そ

んなに新築部室が欲しいか女子部員。
二人にもっと文句を言おうと思ったが、山崎も近藤も心ここにあらずのボンヤリ顔。すでに心は花園か。俺はニヤける二人に言ってやった。

「勝手に行けよ！　お前らなんかもう、友達じゃねーよ！」

サッカー部に残っていた7人は、一年の頃から一緒のメンバーで、絆だけは強いと思っていたからショックだった。女子に友情までが壊された。
いつまでも山崎と近藤のしあわせそうな顔が頭から消えない。まったく、バカでしあわせな奴らだよ。

これで俺たちは5人となったから、6人の新メンバーを集めなければならない。試合は一週間後で、もうかなり難しい。新入生だって弱いサッカー部を嫌って入らないのに、今さらメンバーなんて集まるわけがない。世間のサッカー部のイメージが「かっこいい」かどうか知らないが、この学校では、

「モテない。ノー運動神経」

それが我が男子サッカー部のイメージ。華やかな女子サッカー部の影に隠れる存在。前に遊びで野球部とサッカーをしたら、負けてしまったくらい情けない俺たち。

その後、色々あたってみたが、やっぱり新しい部員は見つからない。ため息が出る……。途方に暮れてボロ部室に行くと、残りの男子部員が揃って俺を待っていた。

「……なに？」

嫌な予感がする……。こんなに早くからみんなが揃ってるなんておかしい。

「俺たち、彼女ができたからサッカー部を辞めます！」

みんなは声を揃えるようにして言った。

……うん、終わった。

「岸田、お前もか？」

「うん、ごめんね。俺たちさあ、みんなで女子部のマネージャーに再就職するから」

「……」

笑えない冗談だ。もう心が折れて、みんなを引き止める気力も出ない。

「お前らってさあ、キスとかしたの？」

そう聞くと、みんなは一斉に顔を赤らた。お前らは、キス一回でサッカー部と俺を捨てたのだ。

「キスってさあ、一回だけだろ？　しかも極めて軽いやつ」

図星のようでみんなは黙った。そりゃそうだ、女子部のやつらは偽装の彼女になるのだから、何回もキスはしたくない。お前らの付

き合いは、一生それ以上の進展がないまま終わるんだよ。
そんな俺の考えを読んだように岸田が、
「キャプテン、サッカー部を辞めるのは申し訳ないと思うよ。でもさあ、こんな機会でもなきゃ、俺たちに彼女なんかできないよ」
「はあ？　お前、どうして彼女が突然できたか知ってるわけ？」
「知ってるよ。男子部を壊そうとしてるんだろ？　だから、向こうだって……俺の彼女、二年生の内田佳奈ちゃんって言うんだけど、佳奈ちゃんも、試合が終わるまでは彼女のふりをしてくれると思うんだよ。もしかしたら、それまでに佳奈ちゃんの情が俺に移って、試合が終わっても俺と付き合い続けるかもしれないだろ」
「佳奈ちゃんねえ……」
岸田の話を聞いて、他のやつらも静かに頷く。
そんなに思いつめるほど、お前らは彼女が欲しかったのか……。
もう俺は岸田の言う願いが通るように、応援したい気持ちになった。がんばるんだよ、バカでモテない君たち。
男子部はすでに崩壊。
いっそ俺にも彼女を送って、きっちり男子サッカー部を消滅させればいいのにと思った。そうすれば、俺だってキスができるかもしれない……。
いンや、俺はそんなこと少しも考えてない！
こうなりゃ玉砕！
女子サッカー部から助っ人を１０人借りる。その１０人はもちろん実質は敵で、試合となったら俺を裏切る。俺は１対２１で戦う。

男の散り方を見せてやる。

三　新メンバー

試合が三日後に迫った。

一年生の美絵ちゃんという女子部の連絡係に、「来てください」と言われて付いて行ったら、女子サッカー部の一年生ばかりが１０人集まっていた。

「先輩、よろしくお願いします！」

「……どうしたの？」

「私たち、メンバーなんですけど」

一瞬、意味が分からなかったけど、すぐに彼女たちが女子部からの貸し出しメンバーだと分かった。

「キミたちが……」

ちょっと驚いた。試合当日にメンバーが貸し出されると思っていたら、試合まであと三日もある。これでは練習まで出来てしまうではないか。しかも、彼女たちは女子部員だから敵のはずなのに、「先輩、がんばりましょうね」なーんて、かわいい笑顔で言う。

「……キミらって俺を裏切らない？　あの……、女子部員だから、

本当は俺と一緒に戦うのは嫌でしょ」

「そんなことないですよ」

一年生たちは口々に戦う意欲をしゃべる。これはどういう……。

戸惑ったが、試合となったら向こうは三年生中心のレギュラーメンバーで来る。補欠の一年生とやっても難なく勝てるだろう。男子の俺が一人混ざっても、実力はほとんど変わらない。そう判断したのかもしれない。

あるいは向こうからしたら男子部員の引き抜きに成功して新築部室問題はすでに解決済み。単なる新一年生たちとの練習試合のつもりかもしれない。

「……キミらってさあ、今度の試合で勝った方が新築部室を使えるって知ってるの？」

「ほんとうですか！？」

一年生たちはざわめいた。

「じゃあ、勝てば私たちが部室を使えるんですか？」

美絵ちゃんが、俺に突っかかるように聞いてきた。

美絵ちゃんは、唯一俺と面識のある女子部の一年生で、グラウンドの使用順とか、そういう女子部との雑用の連絡で、たびたび男子部のキャプテンの俺のところに来る。「美絵ちゃん」とみんなから呼ばれてる彼女を、俺もどさくさでそう呼んでいた。結構かわいい……。

「使えるんですよね？」

その美絵ちゃんが、俺の顔を覗き込むように言う。

「いや、キミたちが使うんだったら、試合に勝っても負けても新築部室は女子部のもんじゃない。こっちが勝ったら部室は男子のもんだよ。まあ……でも、もしも勝ったら、キミたち一年生は使ってもいいけど」

「うわーっ！」

と、一年生たちから歓声が上がった。

どうせ試合には勝てないから、どんな約束をしてもへっちゃら。それより気になるのは、さっきから美絵ちゃんが俺の腕を引っ張るように両手で掴んでることだ。話すときの癖なのか、今なんか俺と腕を組んでるみたい……。

「部室って、冷蔵庫とかあるんですよねー、先輩」

美絵ちゃんが俺の手を引き、キラキラ光る目で言った。

……ちょっと、あいつらの気持ちが分かった気がする。美絵ちゃんに告白されたら、それが嘘だと分かっていても、俺も女子部のマネージャーになるかもしれない。しかもキスのおまけ付き……。

「先輩？」

「う、うん。なんでも揃ってるよ。エアコンもあるし、シャワーも使える」

「いいですねー。でも部室というか、私たち、今度の試合で女子サッカー部の先輩たちに実力を認めてもらいたいんです」

「そうなの……」

一年生たちの決意がどういうものかよく分からなかったが、意外とやる気の一年生たちにチラッと光が見えた気がした。男子サッカー部の破壊工作が上手く進んで、向こうが隙を見せたとしか思えない。

ちょっとやる気が出てきた。女子部の連中からしたら、ひよっ子一年生に囲まれて右往左往する俺を笑い者にするつもりだったんだろうが、これなら一応試合らしくなる。

貸し出しの女子メンバーにあからさまに裏切られたら、スコアは「１００対０」になるかもしれないと心配していたところだ。

まあ、接戦になったら、この一年生たちも俺を裏切るが……。

俺は、一年生の女子を引き連れてグラウンドに繰り出した。

「元」男子サッカー部のバカどもが、グラウンドで女子部のボールを磨いてる。

「じゃまだよ、お前ら」

「あれ？　キャプテン、女子サッカー部の控えのコーチになったの」

「ふざけんな！　お前らと一緒にすんな。彼女たちが男子サッカー部の新メンバーだ！」

「……だって、その一年生たちって、女子の補欠でしょ」

驚けバカども。お前らがいなくても、俺は立派に戦ってみせる。

「俺は、この一年生たちと女子部をぶっ潰す！」

当てつけにそう言ってやったら、驚いた顔の美絵ちゃんに「女子部をぶっ潰すんですか？」と言われて戸惑った。

「潰すっていうか、一試合だけね……」

そういうわけで練習をはじめた。

一年生たちの動きは素早い。キビキビと小気味よく動く。女子部のレベルは思った以上だ。三年生中心のレギュラーメンバーなら、当然もっとすごいだろう。はっきり言って、この一年生と戦っても、元の男子部員では勝てそうもない。

いつもバカにしてるくせに、女子部の連中は俺たちを男子だからと買い被り過ぎだ。一年生たちがメンバーになったことで、予想外の戦力アップ！　まあ、俺を喜ばせて、試合となったら一年生たちに裏切らせて俺を笑い者にするパターンかもしれないが……。

「キミたちって、中学生からサッカーやってたの？」

と聞くと、彼女たちはほとんど同じ中学からサッカーをしている仲間で、中学生の時には全国大会で優勝したという。マジか……。

そういえば聞いたことがある。さすが名門女子サッカー部で、部員の気合からして違う。なんか、女子部のやつらはそんなのばっかり。

意外だったのは、この一年生たちは俺の言うことをよく聞いてくれることだ。三年生の俺の言うことを聞くのは当たり前だが、日頃、女子部の連中に軽く扱われてるから、一年生にもバカにされてるかと勘違いした。

俺はドリブルやトラップが得意で、練習に不熱心だった他の部員をよそにいつも一人でその練習をしていた。その技を教えると、一年生たちは真剣な眼差しで俺の話しを聞き、

「はいっ」

と元気な返事をして教えた運動を繰り返す。これには感動。今まで俺の指導をこんなに素直に聞いてくれた者は男子にもいない。

四　決戦！

ついに、試合当日となった。

グラウンドに行ったらすでに女子部が揃っていて、準備はいいようだ。

土曜日の午後、この青空の下で残酷な試合が始まろうとしている。

女子部員はジャージを着ていて練習と同じ格好だが、俺たちは試合用のユニフォームに身を包んでいた。

オレンジ色の派手な女子の試合用のユニフォームと違って、男子は白を基調とした地味なものだ。それを一年生の女の子たちに着せるのはかわいそうだが、男子サッカー部のユニフォームを着せることで一年生たちが俺を裏切りづらくなるかもしれないという計算があった。

それに、この試合に負けたら男子は廃部かもしれないから、最後

の男子サッカー部のユニフォームの披露になるかもしれない。そういう意味もある。

「そのユニフォーム、恥ずかしい？」

と美絵ちゃんに聞いたら、笑顔で首を横に振ってくれた。

この三日間、練習を一緒にして彼女たちの気持ちが分かってきた。彼女ら一年生の実力は相当なものなのに、一年生からレギュラーに一人も選ばれないのに彼女たちは不満を持っている。彼女たちなりのプライドがあって、自分たちを最初から補欠メンバーとしてしか扱わない女子サッカー部の先輩に軽い恨みがあるようだ。

小さなわだかまりかもしれないが、きっとこの子たちは真剣に俺と戦ってくれる。そう信じるしかない。

「ピーッ！」

ホイッスルが鳴り、男子サッカー部対女子サッカー部の新築部室を賭けた試合が始まった。

フィールドにいるのは女子だらけで、男子と女子で部室を賭けると言っても茶番に思うだろうが、俺は真剣だ。とにかく、最後に残った俺だけでも一生懸命やらなければ、すべてに対して申し訳がない。

万が一、試合に勝って新築部室を手に入れたとしても、部員がいないから廃部は免れない。負けたら男子サッカー部は廃部というか部室もなく自然消滅で、どちらに転んでも明日はない。

試合が始まって、一年生たちから俺におもしろいようにボールが集まる。俺がスルーパスを出すと、フォワードの美絵ちゃんがスルスル前に動いて……シュート！

ズバッ！

と、あっさり1点目を俺たちが取ってしまった。

「キャーッ！」

喜ぶ一年生たち。

喜んで俺に抱きついてくる彼女たちに戸惑ったが、遠慮気味に抱擁を返した。一応、一年生たちと試合の作戦を決めたが、まさか本当に点が取れるとは……。

試合はそのまま、

「1－0」

のリードで変則の前半30分ハーフが終わった。ハーフタイムに一年生たちは興奮を隠さない。きゃーきゃー笑い合っていて、なんてかわいい……。

そして、運命の後半30分ハーフが始まった。

みんな、ありがとう……。もういいよ。

一年生たちは、恐い女子部の先輩に意を含まれているんだろう。ここからは俺を裏切ってもいい。俺はみんなを恨まない。

もしかしたら、一年生たちは俺を裏切るつもりがないかもしれない。だが、もしもこのまま勝ってしまったら、彼女たちの立場がない。女子部はあんなに手の込んだ部員の引き抜きをして男子部を追い込んだ。どうしてもあの新しい部室が欲しいのだ。勝ってしまったら、一年生たちは今まで通りの女子サッカー部の一員ではいられ

ないだろう。一年生たちのお陰で女子部に一矢を報いることができた。それでもう十分だ。

俺は故意に運動量を低下させて緩慢に動く。しかし、それでも一年生たちは司令塔の俺にボールを集めてきた。

「先輩、ケガですか！？」

と、美絵ちゃんが駆け寄ってきた。

「うん、ごめん……」

「隅で休んでいてください！」

美絵ちゃんは疾風のように駆けて行った。その背中に、

「もういいよ……」

と声をかけたが、美絵ちゃんは不思議そうな顔を俺に向けただけだった。

もういいのだ。俺がケガをしたことにすれば、彼女たちも負けやすいだろう。本当にありがとう。俺はキミたちに感謝してる。

俺がゲームに参加しなくなってバランスが崩れた。

徐々にプレッシャーを掛けられ、こっちは守りで精一杯。

それでも僅かの隙に前に走った美絵ちゃんにパスが通る。誰もあの素早い娘に追いつけない。最後は軽いステップでキーパーまで交わし、美絵ちゃんの放ったシュートは無人のゴールに突き刺さった。

わっ

という動揺がフィールドを舞う。
あんなスピード見たことがない。笑顔でほかの一年生たちと喜ぶ美絵ちゃんに、俺も駆け寄ろうとした。

そのとき、

「ゴーゴー女子部！　ゴーゴー女子部！」

と、野太い声援が女子サッカー部に向けて上がった。
女子サッカー部のマネージャーと化した、元男子サッカー部のやつらだ。
なんという無神経。今は、例え敵でも美絵ちゃんに拍手を送るべきだ。「ゴーゴー女子部」と連呼する声を聞いて、無性に腹が立った。
お前らなんかもう、謝ったって絶対にサッカー部に戻さない！

「うおおおおーっ！」

俺は一年生に加わって女子サッカー部を攻める。
もうケガの振りなんかしていられない。

しかし女子部も必死で、ボールの支配率は向こうが完全に上回った。後半になって一年生たちの運動量も落ちて、ついに女子部に１点を返された。

スコアは「２－１」

でも、一年生たちがわざと点を取られているわけじゃない。彼女たちは必死に戦っている。あんな「ゴーゴー女子部」なんて軽薄に

言ってるやつらとはわけが違う。

女子部の一人が体当たりざま、俺の股間を触った……。偶然かと思ったらそうじゃない。ほかの女子部員もプレスする時についでのようにそれをやりだした。男子にも嫌がらせでやるヤツがいるが、女子にそれをやられると恥ずかしくて自然に体が逃げてしまう。俺が逃げるもんだから、いいように女子部員に追っかけられる。もう、なにすんの！

そんな変な作戦で俺は潰された。

残り時間5分となって、ついに女子部に2点目を返される。

スコア「2―2」

サッカーは追いつかれた方が不利と言われている。勢いに乗る相手を止められない。

しかし一年生の執念ともいえる活躍で、最後の女子部の怒涛の攻めを防いだ。

同点で試合終了……！

みんなは2点リードを追いつかれたが、最後の攻めを守りきって、同点という結果に満足しているようだ。俺も一年生たちのすがすがしい顔を見て満足だった。

五　最後のキッカー

引き分けだったが俺たちは負けなかった。

新築部室なんかもうどうでもいい。試合に勝ったとしても、部員がいないからどうせ女子部に取り上げられる。あんなもの、勝手に使えばいい。

最後に一年生たちと一緒に記念写真を撮っていたら、早くして、という感じで女子部員に呼ばれた。

「ＰＫ戦……？」

女子部は決着をつけたいようだ。

ＰＫ戦は５人が順番にシュートを蹴って、そのゴール数で勝敗を決める。やるしかしょうがない。

女子部の最初のキッカーは、あっさりとＰＫを決めた。決めて当然、みたいな顔がシャクに触る。その女子部員が引き上げざま、俺たちの最初のキッカーの美絵ちゃんに声をかけた。

「わかってるね」

という口の動きを、俺はハッキリ見てしまった。

泣きそうな顔で美絵ちゃんが俺を見る。

さっきから、女子部のやつらが一年生たちに鋭い視線を送っているのも気になる。「お前ら、なにやってんの？」という感じか……。それはそうだ。俺だって、一年生たちがどうしてこんなに男子のために戦ってくれるのか意味が分からない。

俺は美絵ちゃんのところに走った。

「美絵ちゃん、大丈夫？」

「先輩、すみません、私……」

「いいよ……。ＰＫは飛行機を落とすつもりでさ、おもいっきり蹴りなよ」

「えっ？」

外せ……、という意味だ。

一年生からしたら、男子部というか、一人ぼっちにされた上にボコボコにされようとしてる俺がかわいそうだったのだろう。だから一緒に戦ってくれた。でも、もう十分だ。

「……先輩、飛行機を落としたら問題になりますよ？」

「なら、鳥を落とすつもりで空に蹴って」

「今夜は焼き鳥ですね」

「うん、なるべく鳩を狙ってくれ。カラスは筋があって嫌いだ」

「うふふ……」

脱線する会話に美絵ちゃんは苦笑いした。

ピーッ！

笛が鳴り、美絵ちゃんがＰＫを蹴ると、ボールは左隅に決まった。

「きゃーっ！」

歓声を上げて喜ぶ一年生。青い顔の女子部員……。
外そうとしたのが間違って入った。と思ったら、美絵ちゃんは右手の人差し指を突き出し、得意そうな笑顔で俺を見た。

「ふっ……」

なんだか楽しくなってきた。

入って当たり前と言われるＰＫだが、やってみると難しい。が、向こうもこちらも難なく決め続け、ついに最後のキッカーの俺の番となった。

祈るように俺を見る一年生たち。俺が外せば試合終了で、もちろん俺たちの負け。
俺は慎重にボールをセットした。

わざと外そうか、正直迷った。
これを外せば試合には負けるが、一年生たちの立場を救うことができる。入れば延長ＰＫで勝敗は分からなくなるが、負けるのであれば俺が外して負けるのがいい。

「先輩、私たちに構わず入れてください！」

美絵ちゃんの声が聞こえる。
ああ、なんかムキになる子だなあ……。おそらく、一年生たちは裏切りの司令を受けていたのだろう。それを潔しとせず、最初から俺と一緒に全力で戦うつもりだったのだ。

ピーッ！

俺は走り込んでボールを蹴った。
ボールは大きく逸れ、ゴールポストの遥か上を通り過ぎていった。

男子サッカー部のボロ部室に、元の男子部員が揃って戻ってきた。
「どなたですか、あなたたち？」
俺は、それ意外にかける言葉を知らない。いったい、どのツラ下げて戻ってきたというのだ。
「キャプテン、申し訳ありませんでした！」
岸田をはじめ、ほかの連中も揃って俺の前で土下座した。
「芝居くせえ……。お前ら、その土下座も練習してきたんだろ」
「キャプテン、俺たち戻ってもいいでしょ？」
「お前ら彼女はどうしたの？　振られた？　あたりめーだバカ。岸田もだろ」
「うん、だめだった……」
「そりゃそうだ。彼女は普通の手段で見つけろよ。裏切り者が栄えた試しはねー、お前らの人生ノートにそう書いとけよ。アンダーラ

インも忘れずにな」

痛々しくてちょっとかわいそうだったが、簡単にサッカー部に復帰させるわけにはいかない。少なくとも、しばらくはダメだ。癖になる。

男子サッカー部のボロ部室は、顧問の先生に頼み込んで取り壊しを待ってもらえることになった。ここから、男子サッカー部を復活させるしかしょうがない。

「キャプテン、あのＰＫってわざと外したの？」

まだ許してもいないのに、岸田が椅子にふんぞり返って俺に聞く。

「うるせー、お前に俺の気持ちがわかるか」

殺風景だった部室に花が飾られている。一年生がやったものだ。あれから一年生の女の子たちが遊びにくるようになり、部室が急に華やかになった。美絵ちゃんなんか、毎日のように来てくれる。

一年生たちは上級生とまだギスギスしてるそうだが、彼女たちはしたたかで表面上は謝ったと言うし、新築部室は女子部のものになったのだから、なんとかなるだろう。

とにかく、来たれサッカー部！

まだまだ俺は、ここでがんばる。

「来たれサッカー部！」　☆おしまい☆

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9274z/

来たれサッカー部！

2011年12月28日23時55分発行